○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

ただいま議長より登壇の許可をいただきましたので、一般質問を開始させていただきます。

数日前に、何か流行語大賞というのが決まったらしいです。御存じ東国原知事の「どがんかせんぎいかん」と（発言する者あり）「どげんかせんぎいかん」と「どがんか」は佐賀弁やったですね。「どげんかせんぎいかん」と、それにゴルフの石川遼君ですか、「ハニカミ王子」と、そういうふうなのが流行語大賞で決まったらしいです。その中に、去年――去年というか、ことしですね、はやった言葉に「都市伝説」というのがあるんですね。いろんなうわさ話をあげつらえ、信じるも信じないもあなたの勝手ですというふうな都市伝説というのがありました。その中でおもしろかったの。例えば、大分前ですけれども、湾岸戦争というのがありました。湾岸戦争があっているときに、総理に防衛庁から「総理、ただいま多国籍軍が攻撃を開始しました」、当時の海部総理は「うん、テレビで見ている」と。その前にアメリカホワイトハウスからのホットラインで総理官邸に、当時は今のブッシュ大統領のお父さんですか、「俊樹、こうやって何時間後、空爆するから」というふうなことをされていたホットラインがかかったけど、官邸内には英語がしゃべれる人がいなかったんで、「オーケー」と言って切ったとか、そういうふうな都市伝説があります。もう１つ、例えば、同じように、阪神・淡路大震災のとき、そのときに同じく、当時の村山首相ですか、村山首相のところに「ただいま阪神地区で、大阪地区で大規模な地震が発生しました」と、これもまた、「テレビで見ている」と。そういうふうな都市伝説というのがあります。

こういうふうなのを何で言ったかというと、情報の伝達ですね。何が危機管理の中で一番重要なのか。情報の伝達だと思っております。そういうところで１番目の危機管理のほうに入っていきたいと思っております。

また、その危機管理のことに触れる前に、さきの２人の質問でも言われましたけれども、私も亡くなられた宮元さんに心より御冥福を申し上げ、家族の方にお悔やみ申し上げたいと思います。

例の事件、大変ショッキングな事件でした。人の命を救う病院内で命が奪われる。本当にショッキングです。また、その後、その拳銃を持った犯人が逃走して、どこに行っているかわからない。そういうことを耳にした市民の方々は本当に不安に思ったと思います。拳銃ば持ったとのどっけおるかわからん。ほんて武雄市内の山ん中にいて、うろうろしようとか、どっか隠れとうとかもわからん。大変不安だったと思います。ここで１番目の質問ですけれども、先ほど今、冒頭から言いました情報伝達。今度は市民への情報伝達はどのように対応されたのか、これをまず第１点の質問に取り上げたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

大庭総務部長

○大庭総務部長〔登壇〕

お答えいたします。

まず、８時35分ごろ、事件発生後なんですけれども、直ちに学校教育課のほうに警察のほうから連絡がありまして、それを受けまして35分ごろ、直ちに小・中学校、幼稚園、保育園、福祉施設に野外活動を控えるように指示をしております。それから、12時ぐらいから市のホームページ、これは緊急災害情報欄というのを設けておりますけれども、そこに掲載をした、事件の概要をですね。それから、オフトーク等によって児童等の安全確保に関する情報の発信をやっております。それから、これは主に学校でございますけれども、１時ぐらいに方針を決定いたしまして、集団の一斉下校及び集団登校の実施、それから青色防犯パトロールの実施、それから登校時間に合わせた育友会、ＰＴＡ及び交通指導員の立哨指導、こういったことの方針を決定いたしまして、すぐいろんな機関に情報を発信し、お願いをしたところでございます。それから、９時半ぐらいから各区長会長へ事件発生の連絡をしております。これは電話によって、まず連絡をしたということでございます。それから、市民に対する緊急メッセージの配布を行いまして、これは事件の発生の翌日でございますけれども、区長会、駐在員さんを通じて配布をさせていただいたところでございます。

以上でございます。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

今、情報発信の方法を言われました。途中で市のホームページ及びオフトーク等による情報発信ということで言われましたけれども、その当時、私もわからなかった。これもさっき壇上で言いました、テレビで知ったんですね、テレビで。ワイドショーかなんかで知りました。オフトークで発信されたと言われましたけれども、私言いましたけれども、わかりませんでした。発信したという確認はとったのか。そのオフトークでですね。もしくは防災無線で市民への喚起をとったのか、もしくはなぜ武雄テレビのほうではなかったのか、そういう要望はなかったのか。やっぱり情報の伝達ですね。国民保護計画の委員で私もおりました。その中で発言したのがいっぱいあります。特に食糧備蓄とかなんとかというのがいろんな話題になってきましたけれども、マニュアルは都会向けのマニュアルなんですね、基本的に。都会のほうは食糧備蓄とか、水をとらなきゃいけないとか、そういうのはもう当たり前のことだけど、反対にこっち食糧基地なんですね。水も源泉なんですよ。だから、そのときの国民保護計画の中でも情報の伝達が一番大切ですよということを常々そこでも言ってきたはずです。今回のこういう事件がありまして、その情報伝達というところありましたけれども、さっき言った３点、本当に放送されたという確認はとったのか。防災無線とか、オフトークですね。なぜ、ケーブルワン、武雄テレビさんのほうでも出さなかったのか。やっぱり市民は早う知ったほうがよかわけですね。例えば、オフトークで、こうやってけん銃持っている

人がわからないと、皆さん、戸締りに注意しましょうとかなんとかというのがあるはずなんですね。防災無線でもあったら、そいぎいつも、田舎というのは結構かぎあけっぱなしにしているんですけれども、それなら、きょうはかぎ閉めようかとか、うちん孫心配けん、どがんなったろうかというのがあるわけですね。そこんところの情報発信が本当にきれいにいっているのか、これを２点目の質問にしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

大庭総務部長

○大庭総務部長〔登壇〕

お答えいたします。

オフトークにつきましては、これは若木地区、武内地区でございますけれども、学校のほうから流していただいたということで、その後の、今、議員おっしゃいました確認までは私も聞いておりません。その辺ちょっと教育委員会のほうで再度確認をさせていただきたいと思いますけれども。

それから、防災無線につきましては、北方には常設の防災無線、山内町には移動用の防災無線ございますけれども、こちらでは発信はしていないというふうに思っております。

それから、ケーブルワンを使って流さなかったのかということに関しましては、これは今までの分は学校というところとか、保育所とか、１つのもうはっきりした施設につきまして、子供たちの安全という面ですぐさまそういった対応とりましたけれども、ケーブルワン等を使った情報につきましては、具体的な情報がまだはっきりつかめていなかった。今考えてみますと、車も西に行ったとか、東に行ったとか、そういった段階で具体的な情報の提供はケーブルワンを使って、市民一般にという部分については控えさせてもらったというところでございます。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

基本的に情報伝達というのは、１つに頼ることなく、複数行うべきだと。これは正確性の問題、あるいはそのスピードの問題ありますけれども、基本的な姿勢としては複数きちんとやるべきだというふうに思っております。そういう意味では、今回、ケーブルワンの関係については、ちょっともう少し時間を置いたときに、きちんとまた検証をしたいというふうに思っております。先ほども申し上げたとおり、あのとき、私も渦中におりましたけれども、さまざまな情報が錯綜しました。そのときにきちんとどれを流して、本当にそうなのかといったことも含めて、これは我々も慎重を期すべき部分がありましたので、その部分ありますけれども、基本的に私は情報はきちんと、とりようはありますけれども、複数流させていただいたという意味では、責務は果たしたんではないかというふうに考えております。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

市長は情報発信得意ですよね。やっぱりこうやって武雄がこの前の新聞で情報発信しているから、佐賀のがばいもまた１位になっていると。今、市長がおっしゃった自治体の責務は果たす。それはもう果たしていらっしゃると思います。ただ、この武雄にとって、より以上きちんと求めてしまうわけですね。

さっき言いました再検証、本当に流したか、流されたかどうかというのを再検証されていない。本当に流れたと思いますか。されているかどうか。さっき言ったように、本部でさえ、西に行ったか、情報が錯綜しているわけですね。テレビ見たとかなんかしたけど、どがんなっとうか、うんにゃ、こっち来たばい、来たらしかばいとか、いろんなうわさが飛び交うわけですね。伝言ゲームみたいに、最初きちんと言うけど、最後はもうとんでもなくなっていると。やっぱり情報をきちんと伝えるというところは、もう本当に大切なところだと思います。

あともう１つ言えば、再検証ですね。これはこの危機管理に限らず、すべて言えると思います。すべてというのはどういうことかというと、例えば、いろんな各種事業でも、何かＡというイベントをやった。本当にそれが費用対効果、そして、効果があったのかという再検証をしなきゃいけない。前、６月議会ですか、６月議会で言いました。時巡り温泉祭とかは、本当に費用対効果はあるのか、再検証したのかと、そういう質問と同じですね。やはり国民保護計画の規則でもなんでもいいです。再検証をきちんとするというところを１行加えていただきたいと思いますし、あとそういう情報というのは、例えば、先ほどおっしゃいましたオフトークというのは我々若木町、武内町の方々には本当に耳目になってくる情報手段なんですね。即効性があると。家の中ですから、家の中、寒いときは閉め切ってでも、家の中ですから聞こえる。暑いときもクーラーかけて閉めているときでも聞こえるというふうな形で、オフトークというのは非常に有効な手段であります。

それと、これも市長が前おっしゃいました。阪神・淡路大震災のときに市長は一部携われたらしくて、その中で一番言われているのが、例えば、携帯電話もつながらない、きちんと車の中とか、外に移動中の分はどうなるかと、そういうのが全く、その阪神・淡路大震災のときは役に立たなかったと。ある日赤ですか、忘れましたけれども、そこの病院の阪神淡路大震災の一番の混乱の原因は情報不足だと、情報がなかなか耳に入ってこなかったというのもあります。

そういう中で、そのオフトーク、そしてもう１点は、どういうところでも聞こえる、例えば、前も言いましたＦＭですね。コミュニティーＦＭか、そういうのの構築。そしてもう１つは、今、佐賀県がやっている安心ネットですか、携帯の番号を登録して、何かありました

よというのが携帯のほうにおりてくる、そういうのができないものか。これはもう例えば、消防団は、火事ですよとなったら、登録しているボタンを押せば、ばっと行きますよね。それと同じように、例えば、安心ネットみたいな形で、さっきのは消防団だけですけれども、今度、全体的にそういう必要な方は登録しませんかということで集めて、これはもう普通のパソコンでできますよね。そういって、もっと言えば、高度な機械があればいいんですけれども、そういうのでできると。今言ったみたいな情報の発信のことをどのようにお考えでしょうか。

○議長（杉原豊喜君）

大庭総務部長

○大庭総務部長〔登壇〕

お答えいたします。

まず、どういう手段があるかということからお答えさせていただきますけれども、まず、ケーブルテレビとか、防災行政無線による広報、それからサイレンを吹鳴しての市民に周知するというようなこと、それから市の広報車、消防車両による広報、消防団や自主防災会による伝達、地域関係者に伝達方法というようなことで、いろんな市が保有するあらゆるこういった情報伝達手段を使いながら、基本的には情報発信をやりたいというふうに思っています。

そしてまた、今後の考え方といたしましては、若木町、武内町でやられているオフトーク、こういったものにかわる手段がないのか、それからＦＭを使った方法がないのかとか、そういういろいろ今情報伝達手段というのが構築をされておりますので、そういったものを十分検討させてもらいながら、どういったものが一番適切に、的確に早く市民に伝達できるのかを検証しながら、検討を進めていきたいというふうに思っております。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

今、部長から答弁いただきました。その中できちんと情報を発信できる、いろんな手段の構築を、できれば急いでやっていただきたいと思っています。やっぱりこういうのはいつ起きるかわからんわけですね。有事っていうのもいつ起きるかわからん。そういう中で、先ほど言いました情報の伝達、情報の発信をきちっとやっていく。先ほど言いましたオフトークの活用もしくはそれにかわるもの、そして防災無線、各種メディア、いろんな方法があると思います。今一番手近なのは携帯電話。もう本当にいろんな方法があると思うんで、何でこがん言うかというぎ、もう１年半前から言いようわけですね。いまだに構築されていないと。ですから、こういうのは本当にいつ起きるかわからないんで、できるだけ早くこういう危機管理ということでやっていただきたいと思います。危機管理に関しては以上であります。

続きまして、観光であります。

観光の部分で、前回質問で財政をお伺いしました。これはもう職員の定数問題まで踏み込んで財政に関して質問しました。少しでも歳入がふえて、市民福祉の向上になればという思いで提言、質問させていただいたんですけれども、今回は観光であります。先ほど山口良広議員も観光について質問されました。

観光の効果というのはもう言うまでもないんですね。先ほどもこちらのほうで幾つか議論がありましたけれども、１万人ふえれば、１億円以上のお金が市に落ちる。例えば、入湯税でも1,000千円以上。これは役所のほうに入ってくるわけですね。10万人ふえれば、10,000千円以上。もうこれも先ほど言いましたけれども、九州の人気物語で、「がばいばあちゃん」は１位でした。九州の物語、観光物語で「がばいばあちゃん」が１位でした。

そういう中で、たまに先日まで私の耳に入ってきたもの、幾つかあります。「牟田君、がばいばあちゃんばいつまで引きずるとね」と言われるわけですね。「武雄市はいつまでがばいばあちゃんば引きずりよっと」と言われます。おれに言わすぎ、「引きずってよかじゃなかですか」と。こがんして１位になっとうし、それで、何よりも市は15,000千円を支出しとうわけですね。そういう中でいろんな一時的にテレビとか、雑誌とかで取り上げられている宣伝効果というのもありますけれども、これから武雄市に本当に足を、去年は、放送があって、いろんなメディアに武雄市というのが取り上げられました。それを足がかりに今度は本当に足ば運んでもろうて、その費用ば回収せんぎいかんわけですね。一時的な効果は十分あっています。これはもう十分基本だと思っております。本当に投資金額を回収する、それ以上のことをするというのは、商売の基本なわけですね。武雄市は、さっき言ったように、まだ夢の途中なんですね。湯布院みたいに、黒川みたいに、もちろん武雄市は湯布院にはなれないというのは市長もおっしゃっていました。だけど、まだ夢の途中だと思います。これを有効にするためには、直接、間接にかかわっている関係者各位の、例えば、市長もいろんな戦略を練っていられるでしょう、いろんな戦術、戦略があると思います。

先日、武雄市内の民間業者が、がばいと楼門と御船山をセットにしてツアーを募集されました。2,000人集まったらしいです。すごかですね。こういう効果というのは物すごくあるらしいです。今、武雄市では観光誘致対策補助金というのがあります。観光誘致対策補助金。それを含め、これからその観光誘致対策補助金を含めた観光客増加に関して、どのような戦略、戦術を考えていらっしゃるのか、ちょっとまずこれを第１にお伺いしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

前田営業部長

○前田営業部長〔登壇〕

お答えしたいと思います。

お尋ねの観光客の誘致の対策の補助金でございますが、これについてはずっと前に泉誘会

という組織があって、そういう中でやった経緯がございます。それの後、市のほうで補助金を組みまして、今、予算額が当初予算で大体1,500千円ぐらいですが、当初、団体客、あるいは修学旅行を対象にこの制度をつくったわけですが、昨年から、例えば、いろんなイベントございますけれども、ことしで言えば、ＴＡＩＺＯ＋ＴＡＫＥＯ展に伴って、団体客、宿泊を誘致しようという取り組み、それから、来年の２月に世界一飛龍窯祭りを開催しますけれども、そこでも団体客を誘致しようということで、そういうイベントにも、この補助金を活用していきたいということで、今後そういう意味でこの補助金の活用を考えていきたいというふうに考えています。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

先ほど部長からの答弁以上に実は大事なことがあって、それはやっぱり物語なんですね。やはり観光客を引きつけるためには、その物語、それは地域の人たちも一緒になって盛り上げる仕掛け、これがセットになって、多くの観光客が来ていただいて喜んでいただけるものというふうに思うわけですね。そういう意味では、一回整理せんばいかんと思うですね。どういうことかというと、今、普通、イベントをするときというのは、例えば、ＴＡＩＺＯ＋ＴＡＫＥＯ展というのは、主には外向けであったと、主には。例えば、佐賀のがばいばあちゃんも、どちらかというと、今のプロモーションは外向けであると。他方で地元のお祭りというのはあるわけですね。いろんなのあると。それが少なくとも他人行儀で見れば、何か渾然一体となっとうわけですね。そいけんが、何を目的とするのかというのは不明確な部分があって、それはちょっと佐賀のがばいばあちゃん課、観光課ですけれども、一たんちょっと整理をしてもらおうと思っています。その上で我々も持てる資源は限られていますので、もう集中的にそれにかかわっていくということを考えていきたい。なぜＴＡＩＺＯ＋ＴＡＫＥＯ展が一定の、70点という評価をしましたけれども、そういう成功になったかというと、そこに一点集中したわけですね、そのときは。だからこそ効果が生まれたものというふうに思っておりますので、また、これも反省点も多々ありますので、年間にどういうふうなイベントをきちんと組み合わせるか、それが外、あるいは中でどういうふうな役割を持たせるかということは、私も含めて議論に加わっていきたいというふうに思っております。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

今、市長の答弁、市長のはもう本当戦略ですよね。部長答弁、対策補助金を有効に活用したいと、これもう何も意味なかですね。意味なかというと、答弁なっていないですね。それを使ってどういう戦略を立てられているのか、どういう戦術を立てられているのかという質

問だったんですけど。例えば、昨年からということなんですけれども、昨年は1,500千円予算つけているわけですね。実際に使ったお金は1,300千円。不用額を出していると。こういうのは本当不用額出しちゃいかんわけですね。営業してどんどん使わんぎ。本当はですよ、これしこ1,500千円で誘致対策しましたと。ばってん、さっき言った、民間が募集したら2,000人集まったとですよ。やっぱりそういうのに乗っかって、営業せんぎいかんですね。本来ならば、例えば、1,500千円使い切りましたと、補正予算でふやしてください。前ですね、同じようなことがありました。今、事務局長をされている緒方局長が、前、観光課長だったときに、足りなくて補正予算で出した経緯がございます。そういうふうにして補正予算で出せばいいぐらい、本当はそっちのほうを使ってやんなきゃいけないわけですね。原資はどうするかと。お金はどうするかと。それはもう、例えば、入湯税は目的税ですよね。観光という目的税。そして、給湯会計の中でそれは２分の１は観光の基金に上げるということになっていますんで、給湯基金。今回の議会で給湯基金の減額というのが出ていますんで、あんまり言うと、事前審査になりますから、あんまり言えないんですけれども、本来ならば、それを原資として、何事も原資が必要なわけですよ。そういうのを原資として、例えば、さっき言った観光誘致対策でも1,500千円つけとうばってん、全然足らんけん、今度3,000千円しますと。3,000千円にしたら、７万人にふえるわけですね。７万人というぎ、７億円、８億円ですよ、武雄に落ちる金は。そして、入湯税だけでも7,000千円、8,000千円ですよ。やっぱりそういうところの営業というのが大切かと思うわけですね。

さっき言いました危機管理のところでも言いました、やっぱり検証というとが大切ね、再確認。さっき言いました時巡り温泉祭、何百万円かかけてやっていると。そういう中で、本当にそれだけの効果が出ているのかと。前回、部長答弁で１万7,000人の方がそのとき来ていますと。これはもうそんとき来ただけの話で、宿泊者がずっとどんくらいふえていったかというのは全く検証されとらんわけですね。そういうのを実質的な数字であらわすためには、こういう誘致対策補助金でどれだけ来ていただけたかというのが本当の数字だと思うわけですよ。

そういうので、時巡り温泉祭がいかんというわけじゃないです。できればこういうイベントにあわせて観光誘致対策の補助金をセットでせんぎいかんわけですね。流鏑馬事業でそういうふうなツアーを募集するとか。例えば、ばんこ祭りをしますと。ばんこ祭りをしたら、そのときに合わせてそういうふうな補助金をもってセットで呼んでくると。補助金をセットで使うと。それともう１つ本当に大切なのは、どういうことかというと、オフシーズン、観光には何事にもオンシーズンとオフシーズンありますよね。例えば、よく言われる夏枯れ、そのときに合わせて何かをやって夏枯れを防ぐとか、そういうなのが本当の戦術だと思うわけですね。それは営業力にかかっていると思います。これは観光協会、市の担当課、そして民間、この三位一体となってやらなきゃいけないと思っております。

今言いました観光誘致対策補助金、今後の使い方、先ほど部長はこれからもやっていきたいと思いますというだけの答弁でありましたけれども、担当課、例えば観光課としてどのようにこういうのを、今ちょうど予算編成作業の途中だと思います。どのようにこれをきちんと使っていこうと思っているのか、答弁を部長よろしくお願いします。

○議長（杉原豊喜君）

前田営業部長

○前田営業部長〔登壇〕

お答えしたいと思います。

先ほどの観光誘致の対策の補助金でございますが、これは発足時は確かに5,000千円程度の予算がありました。その当時はかなり活用あったわけですが、最近は予算額が1,500千円で、先ほどありましたように、若干の不用額が残っているということで、実は先ほど何もしていないということじゃなくて、ことしは特に観光課は営業部になりまして、いろんなエージェントのセールスも行っております。例えば、ＪＲのほうですか、ＪＲ九州がバーサスキャンペーンで佐賀と鹿児島を売り込んでいくという中でも、エージェント回りを観光協会、それから市の職員、そういうことで連携をしながらやっております。それから、秋祭りのイベントについてもエージェント回りをして、とにかくツアーの誘致を図っていきたいということで努力をやっております。しかし、なかなか日帰りのツアーは増勢ができますけれども、まだ宿泊のツアーの増勢がなかなか厳しいということですから、今後はその宿泊に向けて何とか手を打って、その観光客の増加を図っていきたいと、それが一番の今の課題だというふうに考えております。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

今、部長がおっしゃいました。エージェント回りをやっていると。当たり前のことですね。当たり前のことだけど頑張っていただきたい。本当はもう一歩踏み込んで、企画も立てていただきたいわけですよ。商品をつくっていただきたい。さっき言った三位一体で。例えば旅行会社、前、昔、何やったですか、観光宣伝隊って、30人か、40人行く、ありましたけれども、前、ずっと前からあっておりました。「お願いします」って名刺を置いてくるだけですもんね。これもずっと前、議会で何のプラスになりようとかと。ただ、これは一つの武雄市というのを印象づけていただける、そういうふうな効果はあったと思います。だから、もう一歩、やっぱりこれだけ満足度何百位からいきなり２けたに上がった武雄市としては、もう一歩欲しかわけですね。頑張っていただきたいわけですよ。ですから、そういうエージェント回りもいい。エージェント回りもいいけど、さっき言った三位一体で企画も立ててほしい。企画を立てるという中で、この観光誘致補助金というのは市が出すもんですから、こういう

のがあるから、こういうふうな企画をしましょう。今度、例えば、時巡り温泉祭をやって、本当に宿泊をこれしこふやしたかったから、これだけやりましょうと。原資は給湯会計、そして、入湯税あります。観光客がふえれば、それだけまたふえてきます。そういうふうな企画ができないものか。

大分県の別府市の先やったかな、大分市の先にトトロの里というのがあるとですね。私、何度か行って、そこで勉強させていただいたんですけれども、そこの観光課長さんというのは市役所に登庁するとが１年間で12回ですよ。そこの、今度今合併したかどうかちょっと確認していないんでわからないんですけれども、当時の町長さんから、お前は営業に回れ、役所に来んで営業に回れということで、月に１回役所に来て、これだけやりましたと報告のみ。あとはずっと営業だそうです。かいあって、そのトトロの里のところは、当時は30%増しでずうっと伸びていったらしいですね。１年間で30%、その次は170%、ずうっと伸びていって、物すごい観光客数、それはもう営業力。そして、その人は自分のところで企画するらしいんですよね。商品を企画するらしいんですよ。だから、そういう商品を企画して、売り込みに行く、そういう営業をされていると。そこまで本当にやらなきゃいけないというかどうかというのは、また、そちらの判断になりますけれども、そういうのも求めるくらい、今、武雄市は伸びてきていると思います。注目度が高いと思います。先ほど市長がおっしゃいました。物語がもう武雄はもう構築されつつあるんですね。ぜひこの企画、商品企画を三位一体となって、特にオフシーズンにやっていただきたいと思いますけれども、いろいろこれは今のままでも十分ですけれども、より一層武雄が伸びてほしいという気持ちのあらわれの質問だと思って、答弁をお願いしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

半分同感で、半分反対であります。基本的に企画というのは金をかければいいという問題ではなくて、あるいは連携すればいいという問題ではなくて、やっぱりそれは物そのものです。本当に苦心惨たんした上で、その企画を立てる。その企画に従って、さっき三位一体の連携とありましたけれども、それに群がって、それをセールスしていくと。今まで、武雄と言いませんけれども、我々自治体に足りなかったのは、その点の企画力の足りんやったわけですね。今までそれがないままに、先ほどおっしゃったように、例えば、名刺を置いていくとか、今度来てくんさいとか、そういった情に訴えることだったんですね。だけど、本当の魅力をじゃ伝えられたかどうかということに私は甚だ疑問に、これ全部の自治体です、思っておりましたので、自分自身の反省点も踏まえて、例えば、がばいばあちゃんであったりとか、ＴＡＩＺＯ＋ＴＡＫＥＯ展であったりとか、今度、九州三湯物語、これはプレを２月に飛龍窯祭りとセットにして行いますけれども、そういう本当に人の気持ちを打つ企画という

のはしっかり立てていかなければいけないと思っております。幸いにしてまだ私もアイデアがれにはなっておりませんので、アイデアかれるまで、そういう魅力的な人の気持ちを打つような企画をきちんと立てていきたいと。その上で、先ほど話がありましたような、一緒になってセールスをしていくといったことについては賛成でありますので、ぜひその企画を磨いていく応援をしていただければありがたいというふうに思っております。あんまり意見ばっかり聞きようぎんた、どこにでもあるとと一緒になるわけですね。だから、それは私は、企画というのは民主制とはちょっと違うところにある、しかし、そのセールスは民主的に多くの人たちが応援するというふうな運びになればいいなというふうに思っております。ちょっと気合いが入りました。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

まだまだアイデアはかれていないと。もう確かに楽しみにしています。いろんな意見を聞いてということですけれども、これは次の質問でも言うかもしれませんけれども、ぱっとやって、猪突猛進して、わき目も振らず、市民の福祉の向上で動くのが市長の持ち味だと思っております。

そういうことで、観光客に関しては、今、市長がおっしゃったように、いろんなことをかんがみて、三位一体でやっていただきたいと思いますし、さっきから使っている言葉で、原資という言葉があります。やっぱり先ほど市長がおっしゃった、半分は賛成、半分は反対と言われましたけれども、お金云々じゃないけれども、原資というとはやっぱり要ると思います。その原資の確保というのはしていただかなきゃいけない。先ほど言いました給湯会計であり、入湯税、もしくは、例えば今度、何か聞いたところによると、ＧＡＢＢＡがもうすぐデビューされると。例えば、そういうグッズ関連はきちんと役所のほうに、役所のほうというか、それも利益収入にしていいんですよね。その収入を追って、例えば、ＴＡＩＺＯ＋ＴＡＫＥＯ展実行委員会でも、がばいばあちゃん誘致実行委員会でも入れて、収入にして、原資をつけて、例えば、次の何というんですか、ドラマを呼ぶとか、原資にするとか、とにかく原資というのは大切だと思いますけれども、先ほど市長はお金云々というのはあんまりというふうな答弁でしたけれども、私は原資は大切だと思っております。その原資をもとに投入して、先ほど言いました１万人ふえれば１億円の効果、10万人にふえれば10億円の効果、そして、入湯税もそれだけ市に返ってくる。ちょっとその半分意見が合わなかったところなんですけれども、その原資というやつをどう思われているのか。先ほど言ったＧＡＢＢＡというのは、これが注目されていると思いますし、本当は、例えば、さっき言った企画力ですね。ＧＡＢＢＡのデビューでツアー組んでもよかわけですね。そこまでならんかもしれんばってん、それも１つの企画だと思うんですよ。観光客はそれを買っていってくれる。それが

一部が原資になると。入湯税、そういうふうな事業、そして給湯会計、こういう原資というのは、どう考えていらっしゃるのか。ちょっと答弁よかでしょうか。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

原資は大切だと思います。やっぱりプロモート、販売促進かけるにしても、先立つものがないと先立てませんので、そういう意味では賛成です。ただ、それをどこに使うかだと思うんですよね。そういう意味では、使い方について、先ほど牟田議員が御質問ありましたように、きちんとやっぱり検証はすべきだろうと。どこにプロモート、販売促進をかければ、きちんとはね返ってくるか。今回、ＴＡＩＺＯ＋ＴＡＫＥＯ展で私が意外なところに効果があったのは、観光協会の方が東京にプロモートに行ったわけですね。僕もちょっと一部ついていきましたけれども、絶対東京から来んと思うとったわけですね、招待券だけ渡しても。飛行機のただ券も渡したら来ますというのは結構ありましたけれども、それでも東京からやっぱり来とうわけですね。だから、それは本当に着実に効果が、これは観光協会の大ヒットだと思います。それと、それをきちんと連携した戦略課が、あそこに行ってくれ、ここに行ってくれというのは、きちんと指揮していましたので、その効果は生まれているというふうに思っていますので、それをどこに使うかということ。

それと、話はちょっとずれますけれども、彦にゃん問題です。彦根城のメーンキャラクター、彦にゃんですね。当然、御存じだと思いますけれども、ここで使用権をきちんと明確にしていなかったので、今、訴訟問題になっていると。使用差しとめとかなって、まち全体にちょっとブレーキが、せっかくまちおこしにブレーキがかかっていると。そうなってくると、ＧＡＢＢＡもそういうことが予想されますので、これはきちんと商標登録をして、なおかつＧＡＢＢＡの関係については、音源もジャスダックにきちんと登録をした上で、権利をちゃんと保全をしなきゃいけないというふうに思っております。その上でＧＡＢＢＡは、例えば、ＧＡＢＢＡまんじゅうとか、そういった形でどんどん商標登録の範囲内でどんどんつくってほしいというふうに思うわけですね。12月の17日か、18日ごろには、私が聞くところによると、もう発売が開始されます。それに合わせて朝市でライブが行われるというふうに、これは私がけしかけていますけれども、そういうふうな流れでいっております。そういう意味で、観光のツアーとＧＡＢＢＡのライブを合わせたり、あるいは商品開発をそれに合わせたりということで、非常に私は期待しているところでありますので、そういう意味で年末が一つのスタートになるんではないかなと思って期待をしております。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

彦にゃんいいですね。これはもう彦根市の自分の友人も携わっていますけれども、物すごい効果を生み出しているらしいです。例えば、彦根城に行こうと言っても、子供は「城は行きとうなか、どこかほかのところに行きたか」と、ゆめタウン、ゆめタウンがあるかどうかわからんばってん、よかと言うばってん、行くんですね、それで。できれば、ＧＡＢＢＡも、そして、何でしたっけ、レモングラスのキャラクターのああいうのも本当は育ってほしいわけですね。

それで、観光のちょっと最後のところ、最後の質問ですけれども、観光で物すごくウエート占めるのは、食、食べるとですね。おれはあんまり食ぶっと言うぎんた、やっぱりあれの質問すっごたっ質問のうというふうになると思うんですけれども、ここで前、何度も言ったんですけれども、佐賀県の旅行客の満足度１位は呼子ですよね。２位、あっ、これ「じゃらん」やったかな、「九州ウオーカー」か、ちょっと忘れましたけれども、１位は呼子、２位は太良。これはもう何でかと言うたら、呼子はイカという食ですね、食でポイントががあんと上がる。何で太良が満足度２位なのかというと、カニですよね。カニで満足度ががあんと上がると。やっぱりそこの食というのは物すごく大切だと思っております。これは観光客が来ていただいて、先ほどの続きになりますけれども、せっかく来た観光客に満足を持って帰っていただく。そのためには食をきちんとしなきゃいけない。

その中でふと考えたんですけれども、この前、東京行ったとき、ミシュランの本があるわけですね。東京ミシュランというのが出ておりました。自分のいとこがロサンゼルスにいます。ロサンゼルスに住んでいるのがちょっと日本に帰ってきて、九州来るから御飯食べましょうと。じゃ、武雄で食べようということになって、武雄のあるレストランで食べてもらったんですね。そしたら、その人は帰ってきて、東京ミッドタウン、あそこの有名店でフランス料理食べてきて、その次に武雄来て、武雄のほうで食べたんですよ。「武雄がうまかじゃなかか」と言うわけですね。「こっちがうまいよ」と言って、もし、例えば、こういうのが可能なら、武雄も武雄版ミシュランみたいなのをつくっていただければ、外部団体から見てですね。それは全体的な向上につながると思います。ミシュランというのは、もちろん食だけじゃなくて、あらゆるサービス、そういうのも含めてやっていると聞き及んでいます。そういうのを含めて、武雄市内じゃなくて、外部の人間に頼んで、そういうのをつくってもらう。その原資はさっき言ったような原資を使っていただくとかなんかでやるというのはいかがでしょうか。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

それはおもしろかですね。しかし、つくっても、それが売れるかという問題があると思いますね。例えば、東京ミシュランやったら、もう15万部が３日間でもうなくなってしまった

と。それはなぜかと言うぎんた、それを買うだけの需要があるわけですね。武雄ミシュランが、例えば、牟田酒造さんがつくったとする。それをだれが買うんだろうかと。私は何冊か買いたいと思っておりますけれども、それはやっぱりもう少しそれに至るまで武雄のブランド力ば上げんばいかんと思うですね。去年から比べると、議会の皆さんたちのおかげもあって、武雄というのは注目をされています。これ東京に行っても、もう佐賀県武雄というように、武雄から来たら、あのがばいばあちゃんの武雄ねって、ふるさとねっていうぐらいになっています。だから、そのブランド力を上げつつ、そういう本というのは考えられると思いますけれども、ちょっと今、アイデアとしては非常に参考になりましたけれども、その出すタイミングはもう少し待ったほうがよかとかな。大器晩成を目指していきたいというふうに思っております。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

これは販売目的じゃなくて、そういうのがあって、質の向上につながっていければと、来た観光客に見ていただければ。これはもう武雄のパンフレット予算でやっていただいても構わないぐらいのやつだと思っています。ぜひ観光にこれから使っていただきたいと思いますし、何よりもこれから武雄市の観光の、例えば10年後、15年後には新幹線というのが必ず必要になると思います。ぜひこれからも新幹線がやっぱりセットでできます、やらなきゃいけないので、その分も考えて新幹線の分も頑張っていただきたいと思いまして、３番目の事業委託及び移譲についての質問に移りたいと思います。

この武雄市議会の一般質問において、行政が行っているもののアウトソーシングをという質問をよくやります。ことしの３月議会、去年の９月議会でも私はそのアウトソーシングということでやっております。もちろんこれはもうそのときだけじゃなくて、私が議員になってから、行政が自分でやらなきゃいけないと思っているもの、もしくは民間でも十分市民の福祉の向上になるものは、どんどんアウトソーシングすべきだというふうな形で質問をしております。文化会館、図書館、そして公営企業、いろんなのを質問しておりました。一番直近は３月議会で質問をしております。

これはもうその背景というのは再建法の制定ですね。これはもう皆さん御存じのように、国が制定された連結決算は、公営企業の負債、起債も連結決算というふうに見るということになっておりますので、ただの公債費比率ではなく、一般会計だけじゃなくて、公債費比率も公営企業も含めた公債費比率、すべての起債、すべての経営状態含めて判断されるというのが背景にあります。

といっても、一番考えなきゃいけないというのは、市民の福祉向上であります。いかに市民の方々に満足度、そして福祉の向上を与えられるかということ。行政が握っとくよりも、

それを離したことによって市民の福祉の向上になれば、そっちのほうがいいんではないか。反対にこれは逆に市が持っておくべきじゃないかと、そういうようなことで過去ずっと質問してまいりました。

前回、３月議会では、公営企業、限定して病院、水道、競輪事業ということで質問をしてまいりました。その中でまず病院、市民病院であります。昨年出された武雄市民病院事業経営改善報告書が出されました。これ去年の９月ですか、10月やったですか、出ました。今回、先月、経営改革基本方針というのが我々に提出されました。これを去年出された改善化報告書、これはコンサルが書いたものです。今度出た経営基本方針、これつぶさにちょっとやっぱり読んでみると、やっぱり読みようだけやぎ、おっとろしゅう厳しかごと見えるわけですね。そして、先月、この議会でも、皆さん御存じのように、決算委員会がありました。私、企業会計のほうの決算委員会のほうに所属しておりましたけれども、病院のほうの説明では、もうお医者さんも看護師さんたちも目いっぱいやって今の状態ですよというふうな報告もありましたし、本当市民病院にとっては命綱と言える医師の確保も年々難しくなっている、恒常的に確保するのは難しくなっている。そして、何より看護師さんに至っては、募集したけど応募がゼロだったというふうな話も聞いて大変心配しておるもんであります。本当にどうなるんだろうと。

財政破綻した夕張市ですね。夕張市のじゃ、市民病院はどがんなりようかと。この前、テレビの特集かなんかでありよったですけれども、もう維持しいえんわけですね、夕張市は。ところが、これだけ逆に夕張市は有名になったんで、ボランティア医師さんが来てくれていると。もちろんそれだけでも十分足りない状態ですけれども、そういう形でやっていると。だから、ボランティア医師が来てくれるって、もうほんと特異な例ですよね。夕張があれだけ財政破綻したってもうしよったし、何らか地縁、血縁があるのかもしれませんけれども、そういうふうなボランティア医師さんが来て何とかやっている。それでも全然やっていけないと。何事もごとっと来てからは遅かわけですね。

だから、最初の質問ですけれども、市は、我々に報告書が出ました、コンサルの報告書、そして経営改革基本方針、現状をどのように把握しているのか。現状をどのように思われているのか。まず、現状の部分においてのお伺いを、現状把握をしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

田栗市民病院事務長

○田栗市民病院事務長〔登壇〕

ただいま病院の現状をどういうふうに把握しているかという御質問でございます。

現在、今、御質問がありましたように、非常に病院開設して以来、現在８年目を迎えておりますけれども、累積欠損金が６億円ということで非常に厳しい運営をさせられております。

その原因としては、今、お話がありましたように、なかなか医師の確保が難しいというこ

とで、医師の定数は16人ですが、現在12名という体制でやらざるを得ないということで、こちらが希望するような病院の機能、そういうのがなかなか提供し得ずにおるというのが１つ現状です。

もう１つ、その話がありましたように、昨年、診療報酬の改定がありまして、看護体制が新しく７対１というのができました。これによりまして、大手病院のほうがこれまでの10対１から７対１に移りまして、大量の看護師を採用したということで、なかなかこういう小さい地方の病院には看護師の採用も非常に難しくなってきたという状況です。

こういうことから現在、一生懸命、病院の経営に努めておりますけれども、なかなか前途は厳しいものがあると、そういうふうに認識をいたしております。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

私からは、市民病院を取り巻く環境をちょっと御説明させていただきたいと思います。

（パネルを示す）これは地区ごとの救急病院ベッド数であります。これについてももうほとんど一目瞭然ですけれども、県の西部地域、武雄市のまず救急病院のベッド数が非常に少ないということ、それと、ここに、ちょっと見にくうございますけれども、155というベッド数がありますけれども、今、充足しているのは、月によってちょっと変わりますが、100前後ということであります。したがいまして、およそ少ない上に、その機能を果たしていない。これは先ほど市民病院事務長からの答弁でもありましたけれども、それと、もう１つ問題なのは、この西部地区に救急救命の機能を果たし得るところがほとんどないというところであります。例えば、脳外科であったり、心臓外科であったり、これはおよそ24時間救急救命の機能を私は果たすべきだというふうに思っております。そういったものがここにはないということで言うと、そういった医療の空白地区だという指摘を、先ほど私が厚生労働省に出張したときに、そういう厳しい御指摘もありました。したがいまして、こういう市民の医療福祉を我々は守らなければいけないという責務があります。そういうことで、守るためには何をなすべきか、そして、それをできれば維持向上するためにはどうすればいいのか、今、それを真摯に考えているところであります。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

先ほど言いました市民病院経営改革基本方針では、今後の経営形態の種類まで報告があっておりました。今、市長がおっしゃいました。何とか市民の医療、命を守るために何とか救急とか、医療の向上を目指さなきゃいけないというふうなことがありましたけれども、そういうふうな中で、今、現市民病院についての今後の経営形態のほうまで報告がありました。

もちろんこれはもう皆さん御存じだと思いますけれども、まず１つ目は、地方公営企業法の全適、それと指定管理者制度、そして地方独立行政法人、そして、最後に民間移譲、この４つが示されました。経営改革基本方針を読んでいる限り、４番目が一番、４番目に言った民間移譲というのが一番丸が多かったですね。報告書のほうには。我々はどういうふうな状態で市民病院を把握するかというのがわからなかったんで、今お伺いしましたけれども、救急医療がこの西部地区、武雄はもう全くできていないというのが先ほどわかりました。

ただ、もう１つ考えなきゃいけないのは、財政でもあります。これは国立療養所から市民病院に移るとき、当時の石井市長のときは、ある程度の赤字は見なきゃいけないだろうというふうな発言もあったかと記憶しておりますけれども、状況が違うわけですね。例えば、当時、競輪会計からの繰り入れもあっていた。交付税も年々ふえていた、もしくは横ばいか、ふえていたときの状態だと思います。ふえていた状態だと思います。そういう状態と今と、現状では全く今は変わってきております。

そういう中で、さらにその中で、先ほど言いました企業会計の連結指標までとられるようになってしまった。右手に財政、左手にやっぱり市民の福祉の向上、医療の低下を防ぐというふうなことが必要だと思っております。何でんかんでんアウトソーシングというのは、前も市長がおっしゃったけど、いかんと思います。何でんかんでんですね。ただ、これは市民の福祉の向上になると、例えば、病院に限っていえば、医療の低下じゃなくて、医療の向上になるという形での市民病院の今後をつくってほしいんですけれども、この問題も審議会等にかかっていると思います。審議会はあくまで答申というところで、それを市長がしんしゃくして、その後、この議会にかけられるというところだと思うんですけれども、これはもう本当に市長の考えのように、市長が常々言われているように、リーダーシップを発揮して、どれが、例えば、答申が100％いいかどうかわかりません。どれが本当に一番市民の医療向上、医療低下を防ぐというのを選択して、しんしゃくして、我々議会のほうに提出していただきたいと思いますし、それが市長の持ち味だと思いますので、今後の、今、先ほどおっしゃいました地域医療の低下を防ぐと、武雄の医療の低下を防ぐという点で、どのように今後、経営形態を考えていらっしゃるのか、これをお伺いしたいと思います。１番は市民の本当の福祉の医療低下を防がなきゃいけない、右手には財政も考えなきゃいけないと。これをかんがみて、どのように方向性を大まかに考えていらっしゃるのか。これをお伺いしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

基本的に独立行政法人化、あるいは民営化、はたまた直営についても、これは手段であります。先ほど議員がいみじくもお話がありましたように、市民の医療福祉の維持向上のため

に、どういう形態が本当に武雄市にとって望ましいか、その観点から考えますれば、報告書、あるいは審議会で議論があっているように、私は独立行政法人、または民間移譲が手段だと。本来ならば、直営できちんとやるのが一番筋だと思います。しかし、今、先ほど話がありましたように、社会情勢がこれだけ変化をしつつあります。それと、やっぱり求めたくても、医師、あるいは看護師がままならない。そういったことから考えると、先ほど２つの選択肢を申し述べましたけれども、ただどちらもこれは一長一短があります。私は独立行政法人の制度設計をやったことがあります。そういう意味でも、独立行政法人のメリット、デメリットがあります。どういうふうな医療をきちんと持っていくかといったことで、それがメリットにもなり、デメリットにもなりますので、大まかな方向とすれば、独立行政法人か、民間移譲か。しかし、民間移譲もどういったところがどういうふうに引き受けて、どういうことをやるのかといったことも吟味が必要でありますので、そういうことで、まず、どういう医療をきちんとやるかといったことの最終的な議論を今やっておるところであります。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

答弁を受けて思い出したことがあります。さっき言いました国立療養所から市民病院へ移行する際に、特別委員会というのがこの議会にもできました。そういう中で、大きな山が２つあったんですね。１つ目は、財政ですね。２つ目は、職員さん、看護師さん等をどうするかと。これが大きな２つの山でした。

今回の場合、１つ目の財政というのは、武雄の財政の負担を軽くするためにというのもありますが、これはそう大きな問題にはならないかもしれませんけれども、２つ目、看護師さんとか、身分の確保に関してはきちんと対処をしないと、本当に大変なことになると思います。独立行政法人であれ、民間移譲であれですね。現時点ではどの程度まで考えていらっしゃるのか、その点をですね。どちらにしても市民の医療福祉の低下だけは招かないような形でやっていただきたいですし、ベストな方向を選んでいただきたい。そして、ボタンのかけ違いのよう、ベストな手順を踏んでいただきたいと思っておりますけれども、以上に関してはいかがでしょうか。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

私もお見舞いをしたり、通院はしませんけれども、した限りにおいては、武雄市民病院の看護師さん、あるいは医療に従事しているお医者さん、非常に頑張っておられます。もう献身的なと言っていいぐらい頑張っておられます。こういった方々の雇用の継続については、独立行政法人化であれ、民間移譲であれ、これはきちんと条件として、あるいは要求として

貫徹をしていかなければいけないと、かように考えております。

○議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

○25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

数年前ですけど、私、頭を手術したんですね。テレビに映るかどうか、ここちょっとずっと何十針じゃないですけれども、あるんですけれども。やっぱり武雄じゃできんで、よそに運ばれとうわけですね。命に別状というのは大したことなかったんですけれども、本当に先ほど市長がそこでグラフを見せていただいた分ですね、救急対応ができなければ、本当に市民の命を助けるというところの役割ができなくなって、医療福祉の低下、それで医師の確保とか、看護師の不足とかなったらいけないと思いますので、繰り返しますけれども、ぜひ医療福祉の向上、私も先ほど言いました。手術して身をもって感じております。頭を手術したけんが、そがん頭はようならんやったですけれども、低下だけは絶対に招かないような方向性でこれからも執行部は進めていただきたいことをお願いしまして、私の質問を終わらせていただきます。